

6月号 病害虫防除

梅雨時期は病害が発生しやすい時期です。昨年は梅雨が長く、カンキツ黒点病の発生が増えました。降雨状況を把握して防除対策を徹底してください。また、収穫期を迎えているハウスミカンではアザミウマ類や果実腐敗対策をしっかりと行いましょう。

<露地カンキツ>

○黒点病

降雨期間が長く続いたり降雨量が多いと発生が増えます。対策は、①伝染源の除去、②定期的な薬剤防除です。①②ともに徹底して取り組みましょう。

①伝染源の除去

本病の重要な伝染源は、樹上の枯れ枝や園内に放置されたせん定枝です。これらが園内にあると防除をしても発生を抑えることはできません。必ず除去して園外で処分しましょう。また、園内に残っている切り株も本病の伝染源となるので、抜根するか肥料袋などで全体を覆い病原菌の胞子の飛散を防いでください。

特に梅雨時期は降雨が続き定期的な防除が難しい場合があります。そのような場合のためにも、圃場内の伝染源の除去は徹底的に取り組みましょう。

②薬剤防除

薬剤防除にはマンゼブ水和剤(ジマンダイセン水和剤、ペンコゼブ水和剤)を使用し、単用で用いる場合は散布後の累積降雨量 200~250mm または薬剤散布1か月後を目安に再散布を行います。本剤にマシン油乳剤を加用する場合は防除効果が向上するため、累積降雨量 350~400mm が次回散布の目安となります。ただし、マシン油乳剤を加用した場合、散布後2~3日以内に降雨があると加用しない場合よりも薬剤が流れやすくなり、有効成分の付着量が少なくなる可能性があります。防除を行う場合は散布後の天気にも注意してください。マシン油乳剤の濃度は、ミカンハダニの発生が認められる場合は200倍、ミカンハダニの発生が認められない場合は400倍とします。累積降雨量は圃場によって差がみられることから、圃場毎に簡易雨量計を設置して確認しましょう。なお、マシン油乳剤の使用は6月下旬までとします。

ただし、降雨が続いて目安の累積降雨量を過ぎた場合は、雨の合間を縫ってでも散布を行ってください。

○かいよう病

カンキツかいよう病が問題となる園(レモン、いよかん、はるみ等の中晩柑、高糖系温州が植栽された園、幼木園、高接園、風当たりが強い園等)では、6月中旬にクレフノン 200倍加用コサイド 3000 2,000倍またはクレフノン 200倍加用フジドールフロアブル1,000倍等を散布します。

○ミカンサビダニ・チャノキイロアザミウマ

6月は葉上で増えたミカンサビダニが果実へ移動を始めるため、重要な防除時期です。また、近年被害が問題となっているチャノキイロアザミウマについても果実の前期被害を抑える大切な防除時期です。

ミカンサビダニとチャノキイロアザミウマを同時防除する場合は、コテツフロアブル 4,000 倍、マツチ乳剤 3,000倍、ハチハチフロアブル 2,000 倍等を散布します。ミカンサビダニのみを防除する場合は、サンマイト水和剤 3,000 倍、ダニカット乳剤 20 1,000 倍を散布します。なお、サンマイト水和剤にマシン油乳剤を加用すると防除効果が低下するので、散布の際は注意してください。

○カイガラムシ類

5月下旬から7月頃までは、カイガラムシ類の幼虫発生時期です。特に6月上中旬は若齢幼虫が発生する重要な防除時期です。園内の発生状況をよく観察し、適期防除を行ってください。

フジコナカイガラムシが発生している場合は、チャノキイロアザミウマやゴマダラカミキリの防除も兼ねて、モスピラン SL 液剤 2,000 倍を散布します。フジコナカイガラムシは葉や果実の重なったところなどの薬剤のかかりにくいところに寄生することが多いので、かかりムラが無いよう丁寧に散布しましょう。

ヤノネカイガラムシやナシマルカイガラムシ、アカマルカイガラムシが発生している場合は、スプラサイド乳剤 40 1,500 倍、エルサン乳剤 1,000 倍、トランスフォームフロアブル2,000倍等を散布します。

<ハウスミカン>

○アザミウマ類

着色前に園内外の除草を徹底するとともに、ハウスサイドにアルミ蒸着シートや光反射シート織込ネットを設置し、ハウス内へのアザミウマ類の侵入を防ぎましょう。

アザミウマの種類によって効果の高い薬剤が異なりますので、表 1 を参考に薬剤を選択してください。収穫時期が近い園では、薬剤の収穫前日数にも注意します。

アザミウマ類の食害からも果実腐敗は発生するため、防除を徹底してください。

表1 ハウスミカンのアザミウマ類防除薬剤

アザミウマの種類	薬剤名	IRAC コード ※1	希釈倍率	収穫前日数
ミカンキイロアザミウマ 及びネギアザミウマ	ファインセーブフロアブル	-	2,000倍	7日前まで
	ディアナWDG	5	10,000倍	前日まで
	スピノエースフロアブル	5	4,000倍	7日前まで
ミカンキイロアザミウマ	ウララ50DF※2	29	5,000倍	7日前まで
	ダズバンDF※3	1B	3,000倍	14日前まで
	コテツフロアブル	13	2,000倍	前日まで
ネギアザミウマ	ハチハチフロアブル	21A	2,000倍	前日まで

※1 殺虫剤抵抗性対策委員会（IRAC）が定めた作用機構に基づく分類コード（-は未設定）

※2 「みかん」で登録有

※3 「みかん（施設栽培）」で登録有

○果実腐敗防止対策

薬剤防除は、収穫の7～10日前にベンレート水和剤 4,000倍またはトップジンM水和剤 2,000倍のいずれかとベフラン液剤 25の2,000倍を必ず混用して散布してください。薬液が霧状に出るノズルで、果実1つ1つを薬液で包み込むようにムラなく散布することが重要です。

果実腐敗は、果皮の傷から病原菌が感染して発生します。そのため、果実を傷つけないよう丁寧に扱うとともに、収穫の際はハサミ傷をつけないこと、傷果は収穫物に混入させないことにも注意してください。樹上の果実や地上に落ちた果実で緑かび病が発生している場合は、そのまま放置していると菌が飛散し園中に蔓延してしまうため、早急に園外へ持ち出し、適切に処分してください。アザミウマ類による被害果も、果実腐敗が発生するため取り除きます。

<ナシ>

○黒星病

葉や果実に発生した黒星病は、周囲への伝染源となるため、見つけ次第取り除いて園外で処分してください。6月中旬頃までは輪紋病との同時防除を兼ねてキノンドーフロアブル 1,000倍またはフロンサイドSC 2,000倍等を散布します。

6月下旬は、収穫期の黒星病の発生を抑えるうえで非常に重要な防除時期です。発生の有無にかかわらずスコア顆粒水和剤2,000倍等のDMI剤をかけムラがないように散布しましょう。

○ニセナシサビダニ

6月はニセナシサビダニの増殖時期のため、ダニトロンフロアブル 2,000倍またはハチハチフロアブル 2,000倍等で防除を行います。

<ブドウ>

○袋かけ前の防除

病害の発生状況に応じて防除を行います。べと病を防除する場合は、果実小豆大頃までにリドミルゴールドMZ等を散布します。晩腐病を防除する場合は、ベンレート水和剤 2,000倍等を散布します。

チャノキイロアザミウマ対策：アディオフロアブル 1,500倍を散布します。

○袋かけの注意点

摘粒をできるだけ早く終わらせて、すぐに袋かけを行います。降雨後などの果房が濡れた状態では、晩腐病の感染が助長されますので、果房が乾いている状態で行ってください。また、袋の止め口が緩いと雨滴とともに病原菌が袋内に流入するため、止め口はしっかりと締めます。

○袋かけ後の防除

袋かけ直後に、チャノキイロアザミウマ、枝膨病、べと病対策として薬剤防除を行います。チャノキイロアザミウマにはダントツ水溶剤 4,000倍、アルバリン（スタークル）顆粒水溶剤 1,000倍等を、枝膨病にはストロビードライフロアブル 2,000倍を、べと病にはボルドー液（ICボルドー48Q、66D）50倍を散布してください。なお、ICボルドーにアビオンE 1,000倍を加用すると防除効果が向上します。

また、チャノキイロアザミウマは軟弱な葉で増殖しやすいため、副梢の摘心を徹底するとともに、副梢につく2番花（果）房は見つけ次第取り除きます。特に本虫による被害が多いシャシマスカットでは是非取り組みましょう、

<カキ>

○炭そ病

梅雨期は主要な感染時期です。防除にはジマンダイセン水和剤 500倍を使用し、散布後の累積降雨量 150～200mmを目安にジマンダイセン水和剤やエムダイファー水和剤等を再散布します。なお、マンゼブを含む農薬（ジマンダイセン水和剤やペンコゼブ水和剤）の総使用回数は2回なので、総使用回数を超えないように注意してください。散布ムラが無いように、樹の上部にもたっぷり散布しましょう。

○害虫対策

6月中旬頃はカキノヘタムシガやフジコナカイガラムシの重要な防除時期です。スミチオン水和剤40 1,000倍等を丁寧に散布してください。

<キウイフルーツ>

○すす斑病

6月は葉・果実への感染を防ぐための重要な防除時期です。ベンレート水和剤2,000倍またはストロビードライフロアブル2,000倍等を果実だけでなく葉の表裏、棚面の上の方にある枝先にも薬液が付着するように丁寧に散布してください。この時期の防除が不十分だと、後々果実で多発生します。また、枝が遅くまで伸びているような樹で発生が多くなるため、適切な新梢管理を行ってください。

※キウイフルーツは品種によって使用できる薬剤に制限があるため、暦や指導に従って薬剤を選択してください。